

学校園等における家庭教育推進のための  
「オンラインリモート・ワークショップ」の実践研究

—コロナ禍における「とくしま親なびプログラム」の新たな可能性—

Research on Implementation of Online Remote Workshops to Facilitate Upbringing  
in the Home for Children Attending Tokushima Prefecture Schools

— New possibilities during the pandemic: the Tokushima Parents' Assistance Program —

木村直子

KIMURA Naoko

鳴門教育大学学校教育研究紀要

第36号

Bulletin of Center for Collaboration in Community

Naruto University of Education

No.36, Feb, 2022

# 学校園等における家庭教育推進のための「オンラインリモート・ワークショップ」の実践研究 —コロナ禍における「とくしま親なびプログラム」の新たな可能性—

## Research on Implementation of Online Remote Workshops to Facilitate Upbringing in the Home for Children Attending Tokushima Prefecture Schools —New possibilities during the pandemic: the Tokushima Parents' Assistance Program—

木村 直子\*

\*〒772-8502 鳴門市鳴門町高島字中島748番地 鳴門教育大学 教職大学院  
KIMURA Naoko\*

\*Naruto University of Education

748 Nakajima, Takashima, Naruto-cho, Naruto-shi, 772-8502, Japan

**抄録：**本稿では、新しい行動様式に則った「オンラインリモート・ワークショップ」の実施方法を報告し、学校園における保護者支援、家庭教育支援の促進を図る新しい家庭教育支援の可能性を探ることを目的とした。具体的には、第一にリモートやオンライン・ワークショップの実施について先行研究を整理する。第二に、保護者を対象とした「オンラインリモート・ワークショップ」を試験的に実施する中で留意事項等を検討し、事前準備から実施、事後評価（報告）までの手順を整理する。第三に整理した手順を踏まえ実施した、保護者を対象とした「オンラインリモート・ワークショップ」について報告する。最後に、これまで対面で行ってきたワークショップの「良さ」と、「オンラインリモート・ワークショップ」の「良さ」等を検討し、今後の「オンラインリモート・ワークショップ」の展開とその可能性について論じる。

**キーワード：**オンラインリモート・ワークショップ、家庭教育支援 (Family education support systems)、保護者支援、コロナ禍

**Abstract :** This research reports on implementation methodology for Online Remote Workshops in line with new behavioral patterns. The objective was to search out new possibilities on how to facilitate new upbringing styles with a view to assisting parents/guardians at schools, and moving ahead with support on upbringing. Specifically and firstly, we set out to organize existing cutting-edge research on online remote workshops for parents/guardians. Second, we examined the important points as we implemented online remote workshops on a provisional basis, organizing all stages from preliminary preparations to post-event assessments (reports). Third, we implemented based on the above-mentioned stages, and compiled reports on online remote workshops for parents/guardians. Finally, we considered the advantages of in-person workshops compared to online remote workshops in order to present the possibilities of future online remote workshops.

**Keywords :** Online remote workshops, family education support systems, support for parents/guardians, coronavirus pandemic

### I. はじめに

「家庭教育」は、2006年に改正された教育基本法の第10条において、子どもの教育に対する親の第一義的責任と家庭教育の目的が明文化されると同時に、保護者に対する学習の機会及び情報の提供など家庭教育を支援するために必要な施策を教育行政の責任で行うことが示された。これを受け、各都道府県において家庭教育を推進する条例が定められ、家庭教育推進事業が促進されるな

ど、地域特性に応じた家庭教育支援が進められている<sup>1)</sup>。

徳島県では、2016年4月1日より徳島県家庭教育支援条例が施行され、子どもたちが家庭の中で、健やかに成長し自立をしていくための豊かな家族生活を、県が総合的に施策として推進していくこととなった。徳島県の家庭教育推進事業の中でも、県教育委員会生涯学習課において力を注ぎ実践されているものに、家庭教育推進リーダー養成事業がある。この事業では、県独自の家庭教育に関する教材の作成と保護者の参加型学習を進行す

るファシリテーターの養成を行い、ファシリテーターが進行役となりワークショップを展開する(木村, 2016)。このワークショップは、保護者同士が集い、自分の子育ての悩みや子どもとの接し方等を話し合い、お互いの良さや他の家庭のあり方や取り組みに触れながら学んでいく「保護者相互の学びや気づきを取り入れた家庭教育推進ワークショップ」であり、『とくしま親なびワークショップ』と命名されている(木村, 2017; 木村, 2018)。学校園の参観日や児童館などでワークショップに参加した保護者は、それまでの交流の有無に関わらず、同じ時代に子育てをする保護者との楽しい出会いを通して、自らの家庭教育を振り返るきっかけとなっていた。2017年度、2018年度、2019年度と、年々実施する学校園が増え、毎年ワークショップを実施する所も出てきた。県が実施する家庭教育推進ワークショップには3,000名を超える保護者が参加(2020年3月末)するなど、定着が図られてきた。2020年には保護者だけでなく中高生や次世代の家庭教育推進を目指したプログラム集が作成され、徳島県の家庭教育推進ワークショップは全国的に注目されることとなった(全国地方議員研修会, 2020)。その矢先、「コロナ禍」となった。

2020年は世界的な流行となった新型コロナウイルス感染症(COVID-19)の影響によって、人々の社会活動は大きな影響を受けた。流行当初には、ワクチンや治療薬のない未知の感染症の対策として、「三密」(密集、密接、密閉)を避ける行動が求められた。その影響は教育現場にも広がり、「換気が悪く」、「人が密に集まって過ごすような空間」、「不特定多数の人が接触するおそれが高い場所」における集団感染のおそれから、2020年2月27日には全国一斉休校が要請された。休校期間は3月末から5月末まで延長され、地域によっては最長で約3カ月続いた。2021年となった今も、新たな変異ウイルスの出現等により、制約や制限が続いている<sup>2)</sup>。

長引くコロナ禍の影響は、生活の様々な分野に影響を及ぼした。その結果、これまでになかった新しい生活行動様式が生まれた。それは「リモート」や「オンライン」で代替する方法である。「リモートワーク」という仕事の仕方を、仕事以外の社会的な活動に適用した、「リモート飲み会」や「リモート帰省」が推進された。「リモート飲み会」では、オンラインミーティングのためのデジタル技術を「飲み会」という交流に使ったり、「リモート帰省」として交通機関を使った移動を伴う実家への帰省をせずに、オンラインで家族や旧友との進行を深めたりする方法である。これらの例では、同じ現実空間を共有することなく、気軽に飲み会が開催でき、帰省する時間的または財政的余裕がなくても会話ができるという利点もある。そのためリモート行為は対面で行う行為の代替ではなく、新しい可能性を評価する声もある。現在で

は生活から仕事のあらゆる場面において、対面ではなくオンラインで行うことが標準化されつつある。

こういった社会状況の中、教育現場等において大勢が一堂に会し、同じ空間を共有し対面で行うワークショップの実施は厳しい状況が続いている。一方メディア等でも指摘されているように、外出自粛や感染の恐れ、学校園の休校・休園によって、子育てや家庭生活の悩みを抱え孤立している家族も少なくなく、家庭教育支援のニーズは高まっている。コロナ禍の今こそ、学校園における保護者支援の重要性は高まっており、新しい生活様式に則った家庭教育支援の可能性を模索することが急務となった。

## II. 本稿の目的

本稿では、新しい行動様式に則った「オンラインリモート・ワークショップ」の実施方法を報告し、学校園における保護者支援、家庭教育支援の促進を図る新しい家庭教育支援の可能性を探ることを目的とする。具体的には、第一にオンラインリモート・ワークショップの実施について先行研究を整理する。第二に、保護者を対象とした「オンラインリモート・ワークショップ」を試験的に実施する中で留意事項等を検討し、事前準備から実施、事後評価(報告)までの手順を整理する。第三に整理した手順を踏まえ実施した、保護者を対象とした「オンラインリモート・ワークショップ」について報告する。最後に、従来対面で行ってきたワークショップの「良さ」と「オンラインリモート・ワークショップ」の「良さ」等を検討し、今後の展開の可能性について論じる。

## III. オンラインリモート・ワークショップの実施についての先行研究

### 1. 家庭教育支援におけるICTの活用

学校園における家庭教育支援においてICTを活用することは、2017年1月の「家庭教育支援の具体的な推進方策について」(文部科学省「家庭教育支援の推進方策に関する検討委員会」)に示されている。この報告書では、家庭教育支援の方策として「保護者の家庭教育の主体としての立場を尊重し、各家庭がそれぞれの考え方に基づき家庭教育の方針を立て主体的に家庭教育を行うことができるよう、情報提供や学習機会の提供により応援していくという立場に立つことが望ましい」とし、「積極的な情報提供を行うことは、保護者同士の出会いを促し交流の場を立ち上げていくきっかけとなる」と示している。特に「スマートフォン等のICTの活用が効果的である」とし、その利便性として「多忙な保護者でも多く情報を受け取って都合に合わせて参照することができ

る」「適切な情報提供により子供の教育に関する多様な情報に対するリテラシーの向上につながる」「双方向での情報のやり取りも可能である」としている。この検討委員会が報告書をまとめた2017年1月当時、すでにスマートフォン等のICTを活用し連絡や情報提供を行うだけでなく、「双方向での情報のやり取り」についても想定されていた。

## 2. オンラインやリモートによるワークショップの先行研究

コロナ禍以前のワークショップへのICTの活用については、Facebookを活用し、開催者からのテキストでの実況と、参加者からのスレッドへの書き込みによって双方向のやりとりを成立させるワークショップが報告されている（鬼塚ら、2013）。この研究では通信環境の整備により、さらに多くの応用可能性があることが示唆されている。デジタルツールを使ったりリモート上でのワークショップは、技術面では2015年頃には利用可能となっていたが、オンラインコミュニケーションは意思疎通の損失が大きく、伝達できる情報や情動に制限が大きいため、それほど広がることはなかった（剣持ら、2020）。奇しくもコロナ禍によって、これまでの対面での活動に制限が加わり、デジタルコミュニケーションツールを用いたワークショップや授業が注目されるようになった。大学の授業をオンライン化せざるを得なくなったことや、双方向のオンライン会議を円滑に行うソフトウェアであるZOOMが無料で提供されることになったこと等が、オンライン・ワークショップの可能性を広げたと言える。2020年以降、オンライン授業を活性化させる方法を議論した研究報告が多くなされている。井村は、オンラインによる「一体感」をいかに創り出すか、オンラインでの距離感や秩序をどう打ち破り、異文化体験を作りこむかを目的に試行錯誤した実践を報告している（井村、2020）。中でも一体感を出すための方法として、バックグラウンドのバーチャル背景を統一するなどは興味深い工夫の一つである。また剣持らは、ZOOMとMURALを組み合わせて使い、ワークショップの参加者が作成したアイデアをより効果的に共有する方法などを提示している（剣持ら、2020）。さらに國吉は、親子相互交流療法（PCIT）をインターネットで行う方法を報告し（國吉、2020）、これまで対面でなければできないと考えられてきた分野でも、オンライン化が進んでいる。

## IV. 保護者を対象とした「オンラインリモート・ワークショップ」の留意事項

保護者を対象とした家庭教育推進のワークショップを

オンラインで実施するにあたり、ワークショップを推進するファシリテーターの方々を対象に、「オンラインリモート・ワークショップ」の研修会をオンラインで複数回実施し、オンラインリモート・ワークショップ実施の留意事項を抽出した。整理した留意事項は以下の通りである。

### 1. 通常ワークショップと共通する準備で大事なこと

- ①日時を決定する。
- ②ワークショップの目的を明確に整理し、参加者と共有する。
- ③ワークショップの構成を考える。
- ④各ワークの優先度を決める。
- ⑤タイムテーブルを分刻みで設定する。
- ⑥ワークショップのアウトプット（効果や影響）イメージを立てておく。
- ⑦ワークショップのアウトプットを、ワークショップ参加者がどのように活かせるかを検討しておく。
- ⑧ワークショップのタイムテーブルやアウトプットイメージを踏まえワークシートを作成する。

特にオンラインリモート・ワークショップは時間との闘いになる。アウトプットイメージがないと時間のコントロールができない。思いがけないハプニングが起こったり、タイムテーブルが大幅に遅れたりした場合にアウトプットイメージがあると、当初のワークショップの目的から外れずに臨機応変に対応できる。

### 2. オンラインリモート・ワークショップの準備で大事なこと

- ①参加者の役割を確認する。  
オンラインリモート・ワークショップの参加者には、「開催者」「ファシリテーター」「出席者」の3つの役割がある。「開催者」は会議をスケジュールする人であり、とくしま親なびワークショップでは徳島県教育委員会生涯学習課の担当者にあたる。「ファシリテーター」は、ワークショップの進行を務める人で、アイスブレイクを実施したりプログラムを進めたりなどタイムスケジュールを管理しながら、ワークショップを実施する。ファシリテーターは1人でもできるが、複数人で役割を分担すると落ち着いて運営できる。「出席者」は、ワークショップに参加する保護者や学校現場の先生等である。
- ②ワークショップで使用するワークシートを事前に送付しておく。可能であれば、ワークシートをプリントアウトし手で記入できるようにしておく。
- ③「開催者」は使用するオンライン会議用のソフトウェア（ZOOM、Teamsなど）を決め、会議日時の設定や画面共有者の限定、ブレイクアウトルームの使用など

を設定する。

- ④「開催者」及び「ファシリテーター」はプレテストを実施し、ツールの使用を確認し、自分だけでなく「出席者」に教示できるように準備する。
  - ・マイクのオン・オフ（ハウリング時の教示）
  - ・ビデオのオン・オフ
  - ・名前の変更方法【親なびげーたー、〇〇名字】
  - ・ブレイクアウトルームへの移動
  - ・メインルームへの復帰
  - ・ホワイトボードの活用方法
  - ・画面共有の方法
- ⑤当日画面共有する内容確認する。画面共有などの操作は、「開催者」が実施することが望ましい。
- ⑥話さないメンバーはミュートにする。タイピング音や生活音が気になるため、マイクをオフにする。
- ⑦画面表示はスマートフォンであると4名となるので、ブレイクアウトルームでは、「出席者」が4人程度となるようにする。
- ⑧ブレイクアウトルーム機能を使い、グループごとに話し合う時には、各グループに「ファシリテーター」1名が入室することが望ましい。

### 3. オンラインリモート・ワークショップの運営中に大事なこと

- ①ワークショップの開始時間15分前からアクセスできるようにし、「開催者」は「出席者」全員がツールを使えるかどうかを確認する。開始画面にもその方法を共有しておく。
  - ・マイクのオン・オフ
  - ・ビデオのオン・オフ
  - ・表示する名前を変更する。(〇〇小学校, 〇〇名字)や(〇年〇組, 〇〇名字)「出席者」が名前の変更等ができない場合には、「開催者」または「ファシリテーター」が変更する。
- ②参加者の使用している機器等を確認する。(パソコン・スマートフォン・タブレット, その他)
- ③参加者全員が揃っていない場合でも、開始時間を1分経過したら開始する。
- ④始めの5分ほどで、ワークショップの目的と大まかなタイムテーブルを確認する。口頭だけでなく、画面共有をする。
- ⑤ファシリテーターは、なるべくカメラに向かって大きいアクションをとる。

例) うなずく／笑顔を手で表現する／拍手／OKを指で作る／腕を使って大きな○や×の意思表示／意見がある場合には手を挙げる, など。
- ⑥オンラインリモート・ワークショップは意外と疲れるので、休憩や軽いストレッチを取り入れる。45分を

超えるワークでは必ず休憩時間を入れる。

- ⑦ブレイクアウトルームでは、タイマーが表示されるので、ブレイクアウトルームに入ったファシリテーターが参加者に促す。
- ⑧タイムスケジュールには、オンライン上に表記される時間を使うだけでなく、アナログなタイマーを使用し、音を出すことで、「参加者」の注意を向ける。

## V. 「とくしま親なび」オンラインリモート・ワークショップの実施

IVに示した留意事項を踏まえ、徳島県内に暮らす子育て中の保護者を対象に実施したオンラインリモート・ワークショップを2例報告する。

### 1. 絵本を用いたオンラインリモート・ワークショップ

企業において育児休暇中の社員を対象とした研修として、「とくしま親なびワークショップ」の依頼を受けた。いくつかの提案の中から絵本を用いたプログラム（とくしま親なびプログラム集p10「家族をつなぐ絵本の話～こんな時代だからこそ絵本～」）に決定した。


育児休暇中の社員を対象としていることから、保護者は0歳児とともに参加するか、または0歳児の寝ている間に参加することとなる。そのため極力短い時間で、途中で離脱しても再度参加できるように、通常のプログラムから内容を選別し、ワークシートを編集した(図1)。

### 家族をつなぐ絵本の話

ご家庭での絵本にまつわるエピソード、思い出、思い出のある絵本の題名、その絵本とお子さんの姿等思い出していませんか。みんなで家族の(お子さんとの)エピソードについて話し合うことで、子育ての方向性が見えてきます。そして「佐々木先生」のおっしゃる「絵本は赤ちゃんから」の意味をみんなで理解しましょう。あなたは、幼い頃、家族の誰かの膝に座って絵本を読んでもらった経験がありますか。情報が溢れる社会の中で、あらためて絵本が必要な時代だと考えられるようになるのではないですか。

※下記：「絵本が紡ぐ家族のきずな」参照

- 1 お子さんでも、自分でもいいです。好きな絵本の題名、思い出の絵本を1冊紹介してください。
- 2 絵本『おこだてませんように』を聞いて、感じたことや思ったことを聞かせてください。
- 3 絵本の感想について、他の人の意見も聞いてみましょう。



**絵本が紡ぐ家族のきずな**

鳴門教育大学名譽教授佐々木宏子先生は、著書『絵本は赤ちゃんから』の中で、0歳から絵本に親しむことで家族のきずなが育まれるとおっしゃっています。母親の膝に抱かれて絵本に親しむという経験を通して、子供(乳幼児)たちは大好きな人と絵本の中で同じ空間、同じ時間を通いながら言葉を覚え、何よりも愛されているという自尊感情や心が育つと述べられています。絵本のページをめくると短い言葉に絵の内容がすべて込められていることに気づいていますか。

図1 オンラインリモート・ワークショップ用「家族をつなぐ絵本の話」ワークシート

また参加者同士は知り合いではないため、自己紹介を兼ねた好きな絵本の紹介を取り入れた。アイスブレイクには、参加者がワークショップ後にもお子さんと楽しめる、簡単な手遊びを導入した。当日のタイムテーブルの概要は表1の通りである。

表1 タイムテーブルの概要

9時45分	時間	入室
10時00分	3分	「ファシリテーター」挨拶、「とくしま親なびワークショップ」の説明、目的、ワークショップの約束事の説明、マイクのオン・オフの説明
10時03分	5分	○自己紹介 ①参加されているお母さまのお名前 ②お子さんの月齢・お名前とお名前の由来 ③ワークシートの①、好きな絵本のタイトル 1分ほどで①～③の内容を考える。 ファシリテーターからの指名でマイクをオンにして発表。
	5分	○アイスブレイク お家でお子さんと一緒にできる簡単な手遊び。 *お子さんが起きている場合は一緒に。 寝ている場合は起こさなくてよいと伝える。
10時13分	10分	絵本「おこだてませんように」を読み聞かせる。 *子どもではなく、子育て中の保護者に向けて読む。 *読み終わったあとに、一言ずつ感想をもらうことを伝える。
10時23分	5分	それではワークシートに「おこだてませんように」をお聞きになって、感じられたことや、思われたことなど、自由に記入ください。 記入した感想を全員が発表
10時28分	2分	本日の振り返り
10時30分		終了

当日の参加者は9名であった。事後アンケートでは、参加者の100%がワークショップは楽しく有意義なものであり、今後の子育てに活かせると回答していた。参加した保護者の感想には、「絵本の読み聞かせがよかった」「絵本の読み方を参考にしたい」といった読み聞かせをしたファシリテーターの姿に着目したものや、絵本の内容を受けて「叱ること」や「子どもの接し方」を考え直すと思ったというものが多く挙げられた。また「30分という時間が短く感じ、もっと交流したいと思った」など、オンラインリモート・ワークショップを楽しむ保護者の姿があった。

## 2. 複数の学校を繋ぐPTA研修としてのオンラインリモート・ワークショップ

市区町村郡の単位で行われるPTA連合会研修として、「とくしま親なびワークショップ」の依頼を受けた。エリア内の5つの小学校や中学校をつなぎ、PTAの方々と学校の先生方等を対象にワークショップを実施した。参加者は26名で、つなぐ情報機器は15台であった。PTA連合会から「お子さんが話したくなる聞き方」(とくしま親なびプログラム集 p48「子どもが話したくなる聞き方」)に依頼があった。5つの異なる学校がオンライン上で共有できるように、また小学校と中学校の異校種での話し合いが円滑に行えるように内容を工夫し、ワークシートを編集した(図2)。アイスブレイクには、

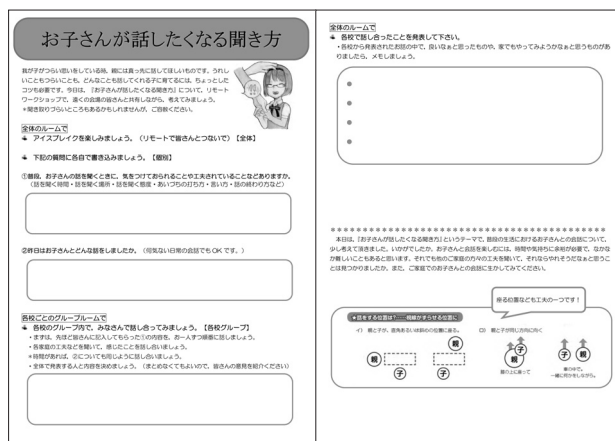


図2 オンラインリモート・ワークショップ用「子供が話したくなる聞き方」ワークシート

保護者と先生方等がともに楽しめるものとした。当日のタイムテーブルの概要は表2の通りである。

各学校の参加者が3～10名であったことから、各学校で1つのブレイクアウトルームを設定し、1人又は2人のファシリテーターを配置することとした。学校の中には、学校の教室に参加する保護者や先生方らが集まり、学校のパソコン1台で参加するところもあれば、保護者が自分のスマートフォンから参加する予定の学校もあった。ブレイクアウトルームで各校が話し合っている間、メインルームには「開催者」と全体の司会役のファシリテーターが残った。ブレイクアウトルームで15分間話し合った後、メインルームに戻り、ブレイクアウトルームでの話し合いで出てきた意見を発表し全体で共有した。最後に全体を振り返り、終了とした。

5校で15台のパソコンやスマートフォンをつなぎ、ワークショップをするにあたり、各校のブレイクアウトルームに1名のファシリテーターと、全体の司会をする1名のファシリテーター、アイスブレイクをするファシリテーター2名(1名はブレイクアウトルームの補助)、

表2 タイムテーブルの概要

7時15分	時間	入室・画面共有(マイクのオン・オフの説明・名前の変更)
7時30分	5分	「ファシリテーター」挨拶、「とくしま親なびワークショップ」の説明、目的、ワークショップの約束事の説明、マイクのオン・オフの説明 画面共有(本日の流れ・約束事の画面)
7時35分	13分	アイスブレイク
7時48分	7分	展開・画面共有(ワークシート) ワークシートの2つの問のワークをする。 ①2問について、各自ワークシートに記入、ストップウォッチを4分に設定。
7時55分	18分	ブレイクアウトルーム 各校を1グループとしてグループセッションの部屋に入ってもらおう 各校ごとに2問を話し合う *各自記入した①の内容を、一人ずつ順番に話して、皆で共有する。 各グループには、1名のファシリテーターがつく。 *15分後に再び全体の部屋に戻ってもらい、発表。
8時13分	12分	全体での共有(1校につき2分×5会場=10分)
8時25分	3分	本日の振り返り
8時30分		終了

開催者の計8名でワークショップの準備をした。準備段階では、次のような注意事項を共有し、本番に挑んだ。

#### ①全体を通して

- ・画面の中では、にこやかな表情でいる。
- ・なるべくカメラに向かって大きいリアクションをする。
- うなづく／手で拍手／OKサイン／手で○をつくる／手をあげる
- ・音が共鳴（ハウリング）したり、話し声や泣き声などで遮られたりする時には、「マイクのマークを押してオフにしてください。」と声かけをする。
- ・今は黒子に徹する方が良いかな？という時は、画面をオフにする。
- ・話す時には、マイクをオンにするのを忘れずに。

#### ②アイスブレイク

- ・アイスブレイク担当のファシリテーター以外のファシリテーターは参加者としてアイスブレイクに参加する。
- ・アイスブレイクの際は、アイスブレイクを盛り上げるように配慮する。
- ・ファシリテーターの声が聞き取りづらい場合などは、「○○ということでしょうか？」と再度説明するよう促す。

#### ③ブレイクアウトルームでの話し合い

- ・どのグループもファシリテーターを入れて、画面は4つまでとし、スマートフォンの画面でも見やすいようにする。
- ・ブレイクアウトルームにおけるファシリテーターの役割は原則タイムキーパーだが、ファシリテーターが話し合いを回す役割を担った方がよい場合もある。「お名前が間違っていたら、すみません。訂正して下さいね。」と声がけし、画面下の名前をみて、一人ずつ「○○さん、お願いします。」と順に声をかける。
- ・各学校は、学校で1つの画面、各家庭から保護者（最大2つの画面）という参加形式のため、1つの画面に複数人参加している時は、「発表して下さい方は、画面の前に来て、お一人ずつ、お話しください。」と声かけする。
- ・ブレイクアウトルーム内での意見交換の様子は、次の3つのパターンが考えられる。同日の参加者の様子で、ファシリテーターとしての関わりを調整する。

#### パターン①

話し合いが参加者だけで進みそうな時は、任せて様子を見る。

「後、5分ほどですが、どなたが発表して下さいますか？発表する内容も考えておいてくださいね。」など、その後の流れにつながる声掛けをする。

#### パターン②

しーんとなって、何かを待たれているような空気の時には、「親なびげーたーの○○です。今日はよろしくお祈いします。では早速、①から順番に情報を交換していきましょう。」といて、話し合いが始まるように介入する。その後は、①と同様。

#### パターン③

話し合いが進みそうにない場合は、ファシリテーター役が介入する。以下は例。「それでは、○○小学校（中学校）PTAの皆さまでの意見交換をはじめます。私は親なびげーたーの○○です。よろしくお祈いします。まずは①の内容から共有していきたくお祈いします。○○さん（画面下のお名前をみて）、お祈いします。では続いて、○○さん、お祈いします。○○小学校（中学校）の方々は、3人いらっしゃいますので、発表して下さいの方が、画面の前に来て、お一人ずつ、お話しください。・・・後、5分ほどですが、どなたが発表して下さいますか？発表する内容を考えましょう。」

## VI. オンラインリモート・ワークショップの今後の展開

本稿は新しい行動様式に則った「オンラインリモート・ワークショップ」の実施方法を報告し、学校園における保護者支援、家庭教育支援の促進を図る新しい家庭教育支援の可能性を探ることを目的としていた。2020年度当初からコロナ禍となり、新たな可能性としてオンラインリモート・ワークショップを実施してきたが、オンラインでもワークショップができるんだという率直な驚きと発見があった。また、リモートで数拠点を結び、中継をしながらワークショップを実施することは、コロナ禍でなければ、実践することはなかったといえる。

実際に実施してみて、オンラインリモート・ワークショップは「時間通りに進める」ことが、非常に重要である。そのためには、物理的に時間を区切るタイマーの活用も挙げられるが、アウトプットイメージをもってワークシートやタイムテーブルを作成することが必須である。プログラムの形式によってはリモートで実施しやすいものと、そうでないものがある。既存のプログラム集から選ぶ際には、ワークショップのアウトプットイメージをしっかり持つことが重要である。場合によっては、プログラムの形式をアレンジすることで、リモートでの実施を可能にする。さらに、リモートでは話し合いに時間がかかるため、30分のワークでは1つ、45分から60分のワークでは2つの話題程度とすることが望ましい。

これまで対面で行ってきたワークショップは、「子育てや家庭生活をテーマに、楽しく和やかな雰囲気共有し、つながりを深め、気軽に相談し学びあう仲間づくり」

をするという目的で実施してきた。ワークショップに参加した保護者は、①自分の子育ての話を大切に聞いてもらえる経験、②他の家庭の子育てについて知る経験、③同じ時代に子育てをしている仲間の存在を実感、④次回顔を合わせた時に話のできるきっかけ作り、⑤同じ思いを抱える保護者との出会い、⑥悩んでいるのは自分だけではないという気付き、⑦自分の子育ての振り返る機会、⑧今後の子育てで活かせるような情報を得ること、を経験していた。これらの経験を保護者がすることは、オンラインリモート・ワークショップにおいても可能である。しかし、「一体感」や「われわれ意識」といった感覚を参加者に体感してもらい、ワークショップの内容を記憶に残してもらうことについては、課題がある。対面での経験と全く同じ経験を提供することは難しいかもしれないが、オンラインリモート・ワークショップも「楽しさ」や「ワクワク」「驚き」といった情動を動かす内容を提供することができれば、参加者の印象や記憶に残ると考えられる。そのためには、技術面での高度化が求められる。実際のワークショップの運営には、ファシリテーターや開催者だけでなく、技術サポートしてくれるスタッフがいたら、さらにワークショップの可能性が広がるだろう。

### 謝辞

本論文は、徳島県教育委員会生涯学習課の『とくしま親なびプログラム集』を基にしたワークショップについて記述している。オンラインリモート・ワークショップの実施にあたり、生涯学習課榎井知恵先生をはじめとする徳島県教育委員会の皆様や、親なびワークショップを支える親なびげーたーの皆様のご尽力に、心より感謝いたします。

### 注記

- 1) 文部科学省「子どもたちの未来をはぐくむ」家庭教育のHPに、各都道府県の取り組みが掲載されている。  
<http://katei.mext.go.jp/>  
(2021年9月アクセス確認)
- 2) 2021年3月からは、変異ウイルスの感染傾向を踏まえ、「ゼロ密を目指そう！～一つの密でも避けましょう～」と啓発されている。  
「厚生労働省、新型コロナウイルス感染予防のために」  
<https://www.mhlw.go.jp/stf/covid-19/kenkou-iryousoudan.html>。(2021年9月アクセス確認)

### 引用文献

- 井村直恵「コロナ禍における Playful なオンライン・ワークショップの実践」情報教育シンポジウム論文集, 249 - 255, 2020
- 釵持祐介, 菅波紀宏, 佐藤彰洋「デジタルツールを使用したリモート参加型ワークショップの可能性」第11回横幹連合コンファレンス, 2020  
[https://doi.org/10.11487/oukan.2020.0\\_C-4-4](https://doi.org/10.11487/oukan.2020.0_C-4-4)
- 木村直子「子どものウェルビーイングを保障する新たな子ども家族支援の可能性：徳島県における家庭教育推進リーダー養成事業の展開を手がかりに」, 鳴門教育大学研究紀要 鳴門教育大学 編 32, 215 - 225, 2017
- 木村直子「学校園等を核とした新しい家庭教育支援の展開と可能性：とくしま親なびワークショップの取り組みを通して」, 鳴門教育大学学校教育研究紀要(33), 149 - 155, 2018
- 木村直子「保護者参加型 家庭教育支援の展開と可能性—徳島県における家庭教育推進リーダー養成事業の取組—」, 第4回全国地方議員研修会, 2020年8月
- 國吉知子「コロナ期における親子への心理的支援—インターネットによるPCIT・CARE・遊戯療法—」心理相談研究, 3 - 15, 2021
- 鬼塚健一郎, 萩原和, 星野敏, 清水夏樹, 橋本禪「Facebookを活用したワークショップの効果と課題—京丹後市五十河地域における取り組みを通じて—」農村計画学会誌, 32巻4号, 507 - 516, 2014

### 付記

本論文は、令和2年度地域連携協力事業研究助成の『徳島県内の学校園における家庭教育支援推進に関する実践研究—とくしま親なびプログラム「リモートワークショップ」による新たな繋がり可能性—』の成果の一部である。